

明治期官立高等教育機関の建築・工芸・図案分野における建築関連洋書の蒐集と教育への波及

A Study on the Collection of Books from overseas in the Fields of Architecture, Crafts, and Designs at Public Higher Institutions in the Meiji Era and Its Influence on Education

北海道大学大学院工学研究院 助教 池上 重康

1. はじめに

明治期の高等教育は主に欧米を中心とした外国人教師ならびに洋書から多くを学んだことは周知の通りである。明治中期に日本人教師が現れるが、まだ日本語の教科書は乏しく、最先端の教育は洋書がその淵源であった。筆者は、明治初期の開拓使（後の北海道庁）と太政官文庫（当時の中央官庁共通の文庫、後の内閣文庫）、工部大学校造家学科（工部省含む、後の帝国大学工科大学建築学科）における建築関連洋書の全貌を明らかにし、洋風建築の導入過程の一要素として建築洋書を位置づけた（池上重康『明治初期日本政府蒐集舶載建築書の研究』、北海道大学出版会、2010年）。本研究は、明治中後期に建築・工芸・図案学科を有する官立高等教育機関が蒐集した建築関連洋書の全貌を明らかにし、その特徴を考察するとともに、教育への波及を探ることを目的とする。

2. 蔵書目録と図書原簿

研究をはじめにあたり、明治中後期に官立高等教育機関が発行した洋書目録を博搜したところ、東京帝国大学建築学教室（前身の工部大学校時代から1930年まで）、東京高等工業学校（1905年、1906年、1907年）、東京美術学校（1906年）の蔵書目録の存在を確認した。次にこれら洋書目録から建築関連洋書を抽出し（ただし東京帝国大学建築学教室図書は全冊）、各機関固有の整理番号と分類に従って、著者名、書名、版、巻、出版年、出版地を整理した。次に、東京大学建築学教室図書室、東京高等工業学校の後身である東京工業大学附属図書館、東京美術学校の後身である東京藝術大学附属図書館の蔵書検索システムで所蔵の有無を確認し、現存するものは可能な限り全冊閲覧して各種書誌情報（受入年月日、蔵書印、資料番号など）を調査した。東京帝国大学建築学教室では、明治期蒐集図書のうち相当数が総合図書館に返納（記録上は返納だが、厳密には移管）しており、それらは関東大震災の図書館全焼により焼失してしまったが、建築学教室に残存したものは焼失を免れ、現在に継承されている。また、東京高等工業学校の明治期蔵書は、関東大震災により全冊焼失しているが、図書原簿だけは偶々焼失を逃れ、欠損はある（全4冊のうち3冊が現存）ものの明治期の洋書蒐集の状況を窺うことができた。東京美術学校は1905年の火災で蔵書の一部を焼失したが、大半が現存しており、図書原簿も学校創立時からのものが現存する。

3. 各学校における蒐集の概要

3-1 東京帝国大学建築学教室の蔵書

東京大学建築学教室の図書目録は、元来は罫線の入ったノートにペン書きで整理されてい

たようであるが、現存する目録は、そのノートの複写物を製本したものになる。記載内容は、図書の受け入れ順に付された教室番号と、著者名、署名、総合図書館で管理している図書館番号のほか、建築学教室内で用いている請求記号が追記されている。時代が下ると購入価格も記載される。

工部大学校時代の蔵書については、前述の拙著で考察したので、ここでは、帝国大学合併以降の蔵書について概観することにした。

帝国大学合併以降に「帝国大学図書館」の整理番号と受入年月日を記載する楕円の印が押されるようになる。教室番号（整理番号とは異なる）の1番から245番までは工部大学校時代の受入書で、帝国大学時代の246番以降の最初の方には、工部美術学校旧蔵書からの移管書を数冊確認できる。283番までは活字印刷の一覧で、約1/4に字消し線が引かれ、「図書館へ返納」とある。明治45年度末（1913年3月末）までに783番までの図書受入を確認できる（ただしが和書6冊）。このうち2割ほどが現存しない。出版地が判明するものだけから判断すると英米書が圧倒的に多く、英書と米書はほぼ同数見られる。独書は50部程度、仏書は10部ほどしかなかった。学科として購入した図書であるため、全てが建築書ではなく、美術書や歴史書なども含むが、いずれも建築関連書と定義するに足る内容の図書である。

ファーガソンやフレッチャーの建築史の図書は出版年から日を置かずに購入されており、イニゴー・ジョーンズの建築書も亦然りであった。住宅書は1900年前後から衛生関係書が散見され、1905年を過ぎると住宅専門書が揃えられ始める。しかし、都市関係の図書はほぼ見られない。鉄筋コンクリート関連書は1905年を過ぎて英書と独書が揃えられるようになり、1910年以降、積極的に購入され始める。東京高等工業学校に赴任した土居松市が、大正時代以降の鉄筋コンクリート書を主にドイツから購入して、日本への普及をはじめますが、それに先立った図書を通じた情報の入手と言えるだろう。佐野利器の著述との比定が望まれる。

東京大学建築学教室の同窓会である木葉会が1909年に発行した『西洋建築意匠集』は、ワシントンDCにある建築博物館の展示を見学した際に、フランスの建築デザイン雑誌Raguenet, Antonin, *Matériaux et documents d'architecture et de sculpture*からの図版転載であることを発見した。当該雑誌は残念ながら東京大学建築学図書館の蔵書内に確認できないが、木葉会関係者のいずれかが、何らかの形でこの雑誌を入手し、学生への建築設計のデザインソースとして提供するべく尽力したことを想定できる。なお、日本国内の公共・大学図書館のどこにも、この雑誌の所蔵は確認できていない。

また、図書のほとんどには多くの書き込みが見られ、頻繁に捲られたと見られる手垢の痕跡や、インクの汚れが目立つ。設計製図の参考資料として活用したのであろう。中には、赤鉛筆で図版番号を指示しているものもあり、本や雑誌への転載、あるいは、試験問題か講義資料に活用した可能性を指摘できる。

最後に、実際の建築への影響を一つ例示したい。右図は、1913年2月に受入れたSmith, Vincent Arthur, *A history of fine art in India and Ceylon*.

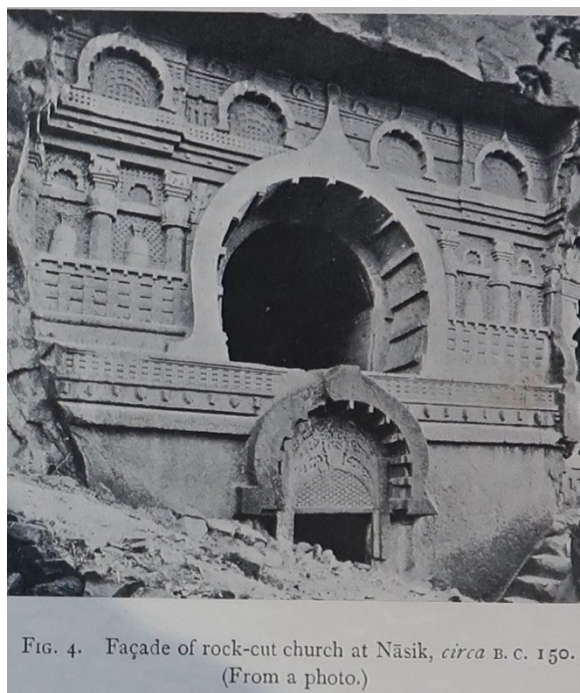


Fig. 4. Façade of rock-cut church at Nāsik, circa B. C. 150.
(From a photo.)

1911 に掲載の図版である。インド・ナシークの古代寺院のファサードで、伊東忠太設計の築地本願寺のファサードに酷似する。伊東は、1904 年のインド訪問の際にナシークを訪れているが、彼のフィールドノートにはこの寺院のスケッチはない。受け入れ年月を考えると、インドから帰朝後に、この図版を目にし、後に築地本願寺のデザインソースとして用いたことは容易に想像できる。インドの古代寺院の図書は他にも数冊あるので、これらを精査することにより、伊東忠太のデザインソースを探ることも可能であろう。

3-2 東京高等工業学校の建築関連洋書

東京高等工業学校の洋書目録は、1905 年発行の『東京高等工業学校洋書目録 [本編]』、1906 年発行の『東京高等工業学校洋書目録追加第一』、1908 年発行の『東京高等工業学校洋書目録追加第二』の 3 冊を確認できた。[本編] は、1894 年に東京工業学校工業教員養成所に木工科が設置されて以来の蔵書と考えられ、1902 年の東京高等工業学校への改組から、附設工業教員養成所に建築科が設置されるまでの期間の蒐集である。追加第二は 1907 年に専攻科である建築科発足直後の編纂になる。図書原簿は、前身組織である東京職工学校時代の 1889 年 4 月の受入から始まっており、1912 年 3 月受入分までを確認できるが、それ以降 1917 年 12 月までの受入原簿は失われている。洋書目録では類毎の整理番号を付していたが図書原簿では原則受け入れ年月日順に登録番号を付している。ここでは紙幅の都合もあるので、[本編] に着目して考察を進めたい。

洋書目録 [本編] は分類目録となっており、その第 8 類が ARCHITECTURE である。さらに 1: Construction, 2: History, 3: Architectural Hygiene, 4: Wood Work and Joinery, 5: Special Architecture, 6: Furniture and Decoration, 7: Miscellaneous に 7 分類されている。購入順に No. が振られており、161 部を数えるが、同じ番号の叢書や、複数冊の所蔵もあるため、実際の冊数はこれより多い。過半が英書であるが、独書が 20 冊、仏書が 7 冊含まれている。前述の拙著で報告した工部大学校蔵書に一部類似が見られるが、コンドル着任以前に揃えられていたような米国出版のパターンブックの類は、ここには多くを見出すことはできない。建築の初学者を対象とした蔵書ではあるが、その内訳には木工継手が 34 冊、家具装飾書が 13 冊と目立つ。木工科時代の蒐集図書なのであろう。ところで、『建築雑誌』1975 年 12 月号の特集記事「私の受けた建築教育」では、当時存命していた大正期に高等教育期間で建築教育を受けた著名人の体験談が記録されている。大正初期であるため、明治期と基本的に教員の変化はないので、参考とするのに十分であろう。東京高等工業学校を 1916 年に卒業した平林金吾によると、参考書は基本的に洋書であり、各種構造は齋藤兵次郎、歴史、様式、意匠、計画、設計、製図は前田松韻に教わり、設備は滋賀重列が Architectural Hygiene を逐次日本語訳して講義していたという。該当書は 1903 年 8 月受入の Fletcher, B. and Fletcher, B. F., *Architectural Hygiene; or Sanitary Science as Applied to Building*. 2nd. Ed., 1902 であろう。明治末年までの受入書を精査しても同名の図書は見当たらない。前田松韻が担当していた、歴史、様式、意匠、計画、設計、製図に相当する参考書は、具体的な授業像を想像しながら、それを見つけ出すことは難しい。Fletcher, B. and Fletcher B. F., *A History of Architecture on the Comparative Method for the Student Craftsman and Amateur*. (1903 年 3 月受入) が見られる程度で、Tuckerman, L., *The Five orders of Architecture according to Giacomo Batozzio of Vignola*. 2nd. Ed. 1896 (1892 年 10 月受入) や、*The American Vignola*. (1903 年 7 月受入)、Ruskin, J., *The Seven Lamps of Architecture*. (1902

年 9 月受入) など古典的名著は Div. 7 Miscellaneous に分類されている。しかしながら、Tuckerman, *The Five Orders of Architecture*. のオーダーの図版は、同科の製図様教科書である 1908 年刊行の『和洋建築製図手本』にそのまま転載されている。追加第一では、64 冊、追加第二では 90 冊の追補を確認できる。建築科の発足に併せ、教科書としての蔵書も逐次充実していったのだろう。明治末年までに 186 冊が追加された。

3-3 東京美術学校の建築関連洋書

東京美術学校の洋書目録は 1906 年発行の『東京美術学校文庫洋書目録』が確認できるのみである。また、東京藝術大学附属図書館には開校以来の図書原簿が残されており、かつ、現存する図書も多い。ここでは洋書目録と図書原簿を比較し、現存する図書の書誌情報で補完することにより、1905 年までに東京美術学校で蒐集した建築関連洋書の特徴を考察する。

洋書目録は分類目録で、その第 1 章が Fine Arts であり、Architecture の他、Decorative and Ornamental Art, Drawing, History of Art, Archaeology など関連分野を含む。ほぼ受入順に番号を付け、著者名のアルファベット順で掲載し、整理番号、著者名、書名、出版地、出版年を記載する。図書原簿には、更に納入と受入年月日が記載される。受入初期には、著者名と書名をカタカナや日本語訳で記載することが多かった。洋書目録を編纂した時までに失われた図書があっただけでなく、洋書目録に記載はないが、図書原簿にあり、かつ現存する図書もいくつか確認できた。過半が英書で 64 部あり、仏書が 25 部、米書が 21 部、独書が 11 部あった他、日本、イタリア、オーストリア、ハンガリーの図書が散見される。

『近代日本建築学発達史』(丸善、1972 年)によると、1889 年の東京美術学校発足時に、絵画、彫刻、建築、図案の 4 専攻科目が計画されたというが、実際には日本画と彫刻の 2 科を開講するに留まった。しかしながら、初期受入図書には建築関連書が目立ち、それら図書の「受人」には「ビゲロー氏寄贈」、「美術取調委員ノ購入」とある。「ビゲロー」とは、W・S・ビゲロー (Bigelow, William Sturgis, 1850-1926) のことで、米国の医師兼日本美術研究家である。また、「美術取調委員」とは、1886 年から 1887 年にかけて、フェノロサ、浜尾新、岡倉覚三(天心)の 3 名が文部省図画取調掛委員として欧米に美術教育と美術事情の調査に赴いた組織を指す。開校当初の受入図書の内訳を見るに、建築科の設置は画餅ではなく、計画性をもって準備されていたことが窺われる。

建築系の教員として、1891 年に久留正道、1893 年には塚本靖と伊東忠太を迎え、1897 年には日本画と彫刻科にあった図案と建築の授業を母体に図案科を独立させた。この時、塚本が 5 冊の洋書購入に携わっているが、そのうち 3 冊が建築装飾の本であるところに、図案科を建築教育というよりも建築装飾を目的としていたことが読み取れる。その後、大沢三之助、古宇田實、武田五一が赴任するが、図書の購入に直接関与した記録はない。ただし、古宇田が 1919 年に齋藤茂三郎と共訳で岩波書店から出版した『建築史』の元本である、Fletcher, B. A., *History of Architecture*. の第 4 版が、1902 年に既に蔵書となっていることは注目に値する(古宇田が翻訳したのは第 5 版である)。

納入に、明治の写真師高橋仁太郎、フランス文学の翻訳出版に携わっていた堀川柳助、丸善の取締役金澤井吉などの名前を見る他に、東京美術学校第 5 代校長を勤めた正木直彦の寄贈書や、東京美術学校教授で美術批評家の岩村透の旧蔵書の寄贈もある。

紙幅の都合により、1905 年までに受け入れた 144 部に限定して、東京美術学校が蒐集した建築関連洋書の特徴について考察した。東京高等工業学校とは異なり、実践的な建築技術

書は少なく、建築理論書や建築装飾書が目立つコレクションであるといえる。その後、明治末（厳密には 1913 年 3 月）までに更に 186 冊が追加された。これらも英書が大半であるが、時代を反映してか建築装飾書の他に、家屋構造書などが散見されるようになる。

4. むすび

東京帝国大学建築学教室、東京高等工業学校、東京美術学校が明治期に編纂した洋書目録の記載情報を基礎資料に、東京大学建築学教室図書室、東京工業大学附属図書館、東京藝術大学附属図書館が所蔵する図書原簿の情報と現存する図書に残された書誌情報から、明治期官立高等教育機関の建築関連洋書の全貌の把握を試みた。紙幅の都合から、作成した全リストを提示することは叶わないが、今後、何らかの形で公開できるよう計画している。

本報告では、概略を報告するに留まったが、近代日本における洋風建築の導入過程に、外国人建築家の指導、海外における学習に並んで、建築洋書は決して無視することのできない存在であることは少なからず証明できたであろう。近年の電子情報の集積は著しく、本研究を通じて存在を知り得た明治期蒐集の建築関連洋書のほとんどは、インターネット上で閲覧が可能となっている。日本国内に図書が現存していない場合でも、蒐集洋書のリストがあれば、その本を海外の図書館に赴かなくても閲覧できるのである。明治期の建築家が見た可能性のある図書を博捜すれば、明治建築のデザインソースを特定することができる。本研究を以て、新たな日本近代建築史研究の地平が切り開かれた。

今後の課題として 2 点あげて、本報告を結びたい。1 点目は、図書の閲覧を通して得られたことだが、建築系雑誌も同様にデザインソースの源流の一つといえることである。本報告には反映しなかったが、日本が近代化に邁進した明治時代にアナロジーするように欧米の建築雑誌が興隆を見せていたことを確認した。東京工業大学と東京藝術大学の図書館には相当数の充実した欧米の建築雑誌がコレクションされている。これらの図版を精査することにより、図書と同等かそれ以上の日本近代における建築科のデザインソースを知ることができるであろう。2 点目は、更に時代を下る必要性である。1920 年代後半のモダニズム建築の隆盛を迎えるまでは、西洋の様式建築の学習が建築教育の主流であった。いわゆるゼセッションもまた様式の一つであると考えた場合、欧米の建築雑誌からの影響は計り知れないものがある。なお、これについては、住宅建築に限定してであるが、2024 年度第一生命財団「都市とくらしの分野」研究助成を得て、研究を遂行中であることを付言しておく。

発表論文

池上重康「明治期東京高等工業学校蒐集舶載建築書について」(『日本建築学会大会学術講演梗概集 建築歴史・意匠』、2023 年 9 月)

池上重康「明治期東京美術学校蒐集舶載建築書について」(『日本建築学会大会学術講演梗概集 建築歴史・意匠』、2024 年 9 月)(発表予定)